九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北コロラド大学の体育・スポーツ

金崎, 良三
Institute of Health Science Kyushu University

https://doi.org/10.15017/505

出版情報：健康科学. 10, pp.161-166, 1988-02-20. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

J. Health Sci., 10 : 161 − 166, 1988.

紹介

北コロラド大学の体育・スポーツ

金　崎　良　三

Introduction of Physical Education and Sports in the University of Northern Colorado

Ryozo KANEZAKI

はじめに

昭和61年度の文部省在外研究員として，アメリカ合衆国に昭和61年8月から62年6月にかけて10ケ月間出張させて頂いた。留学先はコロラド州の北コロラド大学で，ここに9ケ月間滞在してスポーツ行動の規定要因に関する研究に従事した。アメリカ滞在中，数々の貴重な経験を積むことができ大変有難く思っている。以下本稿では，北コロラド大学の体育・スポーツについて紹介したい。

1. 北コロラド大学（UNC）

アメリカ中西部のコロラド州には，ロッキー山脈が南北に走っている。州都デンバーはこの山脈の中腹にあり，標高約1マイル（1600 m）の高さに当たることからマイル・ハイ・シティと呼ばれている。このデンバーから北へ91 Km，ロッキー山の東56 Kmのところにグリーリーという人口約63000人の小さな町がある。北コロラド大学（University of Northern Colorado，通称UNC）は，この町の東寄りにある。グリーリーは，大変過ごしやすい町である。1年のうち平均して325日は，太陽が顔を出すという。雨は少なく，冬場の雪もそれ程ではない。特に，春と秋の気候は快適である。空は透き通るように青く，空気はさわやか，緑も豊富で美しい。遠く西の方には雪を戴いた雄大なロッキーの山々があり，その眺めは実にすばらしい。町の人たちも，親しみやすくとても親切であった。

UNCは1889年に創立されており，やがて100周年を迎えようとしている。もともとは，教育系の単科大学として出発しており，大学の名称もColorado State Teachers CollegeとかColordo State College of Educationと呼ばれていた時代が長く続いた。現在の名称になったのは，1970年に総合大学となってからである。UNCには，現在6つの学部（①Arts and Science，②Business Administration，③Education，④Health and Human Services，⑤Human Performance and Leisure Studies，⑥Performing and Visual Arts）と大学院が設置されている。総合大学といっても，教育，ビジネス，芸術，人文・社会科学など，教育系，文系の学部が中心である。学生数は，創立当初は76人だったと記録されているが，現在は約9000人の学生が学んでいる。性別では女子学生の方が男子学生より多く，その割合は約3対2である。ほとんどの学生がコロラド州の出身であり，他州出身者は9％程度である。また外国人留学生は，1986年度で125人，そのうち日本人は4人ということであった。台湾，中国，マレーシァ，シンガポールなど，アジアからの留学生が多い。教官数は，非常勤を含めると500人を越える。

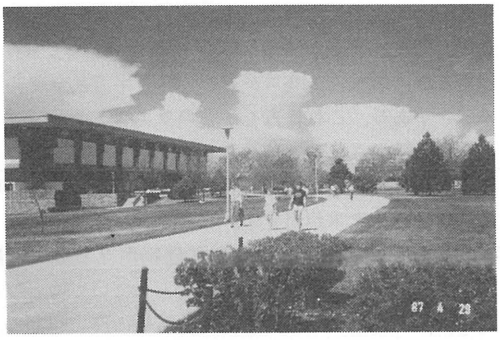
キャンパスは約240エーカー（97万平方メートル）の広さがあり，これは古くからのウエストキャンパスと新しく拡大されたメインキャンパスから成る。ウエストキャンパスは，100年の歴史を示すかの如く古い様式の建物や大木が目立つ。これに対してメインキャンパスは，面積も広く近代的な建物が立ち並んでいる。全体的に，キャンパスは広々としていてゆとりがあり，また芝生がきれいである。気候の良い時期に，学生たちがあちこち芝生の上に腰を下ろして話をしたり，本を読んだり，寝ころんだりしている姿をよく見かけた。日本の大学にも，こうした芝生の空間があったらどれだけゆとりを持てることであろうか，とつくづく思った。

UNCは4学期制（Quarter）を採用しており，学年暦によると秋学期は9月下旬〜12月中旬，冬学期は

Institute of Health Science, Kyushu University 11. Kasuga 816, Japan.

1月上旬～3月下旬，春学期は3月下旬～6月中旬となっており，各学期11週間の間に講義と試験が行われる。夏は休暇に入るとはいえ，6月下旬から8月下旬にかけて多種多様な短期コースやワークショップが開かれる。年間を通じて大学が設けている学科目（Academic Program）の数は約160，講義数は3500前後にのぼる。講義は朝8時から始まる。特別に昼休みという時間帯は設けられていない。UNCには社会人学生のために夜間部（Evening division）があるので，夕方始まって午後10時まで行われる講義もある。全講義数の約6分の1が，午後4時～10時の時間帯に行われるということである。要するに，朝早くから夜遅くまでキャンパス内には学生の姿が見られる。

メインキャンパスの中央付近には，近代的な図書館が立っている。ここには，約120万点の書籍，雑誌、政府刊行物，マイクロフィッシュ，スライド，テープ，地図，その他が集めてある。この図書館は，実に利用しやすかった。本や雑誌は自由に手に取って見ることができるし，必要な個所はすぐその場でコピーすることが可能である。文献検索には，従来のカード式に加えてコンピュータが導入されており，目指す文献についての情報が容易にわかる。また，キーワードをいくつかインプットすると，それに関連する文献をたちどころに示してくれる。コンピュータは，コロラド州内の他の大学や公共図書館（UNCの場合は合計6個所）とオンラインで結ばれており大変便利であった。



ＵＮＣメインキャンパス内
（左側は図書館）

2．体育部門の組織と教育

私が所属した体育部門（Department of Physical Education）は，Human Performance and Leisure Studiesという学部の中にある。この学部は，つい数年前まではThe School of Physical Education and Recreationといっていたが，新しく改組されて今日の名称になった。ここには体育部門の他にキネシオロジー（Kinesiology），レクリエーション（Recreation）及び運動競技（Intercollegiate Athletics）の計4部門があり，学校や行政，実業界における体育・スポーツ，運動，レクリエーション，コーチングの専門指導者，管理者の養成教育をしている。また大学院においては，さらにレベルの高い専門管理者や教育者を育成している。体育関係では，Master of Arts及びDoctor of Educationの学位が取れる。

体育部門は，人間の動きを研究するとともに，学生には教育やキネシオロジー，スポーツ，ダンス等について理解を深めるべくカリキュラムが組まれている。卒業生は，学校の教師をはじめコーチ，トレーナー，スポーツクラブの指導者，健康・体力づくりの専門家などとして活躍している。コロラド州の体育教師やコーチの半数以上は，UNCの卒業生であり学士または修士の資格取得者である。

現在，体育を専攻する学生は約200名，大学院生は約70名いる。これに対し教官の方は，教授6名，助教授1名，講師9名，助手6名の計22名である。しかしながら，これは組織上の定員配置であり，実際にはこの他にも他の部門に属する教官で体育部門の講義を担当する者もいる。表1は，体育関係の講義科目を示したものである。体育部門では，これらの科目は一応必修科目と選択科目に分かれている。似たような名称の科目がいくつかあり，その内容も想像しかねるものもある。また，例えば「スポーツ傷害」という科目でも，別の名称でこれに関連するものもあるが，ここでは一本にまとめているので，実際の講義数はもっと多くなる。ともあれ，さまざまな講義が行われているという印象である。

私は，セージ教授（George H. Sage）の研究室に席を置いて研究に従事するとともに，体育部門ではいくつかの専門課程の講義に出席させて頂いた。以下に，これらの講義科目名とその内容を項目として示すことにする。

(1)体育・スポーツの社会学的解釈

セージ教授担当，秋学期，週3回，1回50分，受講生約20名，学部生対象。

①スポーツ社会学の紹介
②北米スポーツ興隆の社会的・文化的背景
③スポーツと社会的価値
④スポーツと教育
⑤スポーツと政治

表1　体育関係の講義科目

理論・実習系	体育序説，体育の見方，保健体育・レクリエーション序説，体育・スポーツの歴史，体育管理，体育・スポーツの社会学，体育・スポーツの社会学的解釈，女性とスポーツ，人間行動の諸問題，体育測定評価，保健体育・レクリエーション評価法，キネシオロジーの概念，解剖学的キネシオロジー，力学的キネシオロジー，生理学的キネシオロジー，心理学的キネシオロジー，コーチング論（各種目別），スポーツ審判法，運動学習理論，運動競技の管理，運動競技の諸問題，保健体育のカリキュラム，体育科教授法の分析，応用体育学，小学体育活動，小学体育の方法と評価，中学体育の方法と評価，精薄者の体育，身障者の体育，体育研究法，スポーツ傷害，体力原理，運動処方，救急法と安全，水難救急法，保健体育・レクリエーションの相互関連，体育の研究と報告，ダンスの歴史と哲学，小学校リズム教育，ダンス指導法，モダンダンスの技術と構成，フォームの即興と構成，体育セミナー，保健体育・レクリエーションワークショップ，教科教育法，教授法セミナー，体育研究セミナー，体育ワークショップ，体育実習，キネシオロジー実験，スポーツ生理学セミナー，スポーツ力学セミナー，スポーツ心理学セミナー，モダンダンスワークショップ，卒業論文
実技系	ソフトボール，テニス，サッカー，バレーボール，バスケットボール，フットボール，野球，ゴルフ，ラグビー，水泳，ラケットボール，フェンシング，陸上，バドミントン，アイススケート，ローラースケート，フイルドホッケー，レスリング，ボウリング，ビリヤード，フラッグフットボール，スキー，バックパッキング・ハイキング，体力づくりコンディショニング，ウエイトトレーニング・コンディショニング，体操，タンブリング・体操，リズム体操，モダンダンス，ジャズダンス，社交ダンス，フォークダンス，タップダンス，民族ダンス，アメリカンスクウエアダンス，エアロビクスダンス，バレエ，ストレス管理のための活動，自己防衛活動

（注）1.大学院生対象の講義も含む。
2.実技系は一般体育の種目も含む。

⑥スポーツと経済
⑦スポーツとマスメディア
⑧社会階層とスポーツ
⑨スポーツと性と人種
⑩米国スポーツの現状と将来

(2)女性とスポーツ

コーディ教授（Carolyn A. Cody）担当，秋学期，週2回，1回50分，受講生約14名，学部生対象。

①スポーツの性格
②女性とスポーツの社会的・文化的側面
③女性とスポーツの生物学的・生理学的側面
④女性とスポーツの心理学的側面
⑤女性とスポーツの歴史
⑥女性のスポーツ参加を規定する政治的要因
⑦女性とスポーツの将来

(3)体育・スポーツの社会学的解釈

コーディ教授担当，冬学期，週3回，1回50分，受講生約25名，学部生対象。

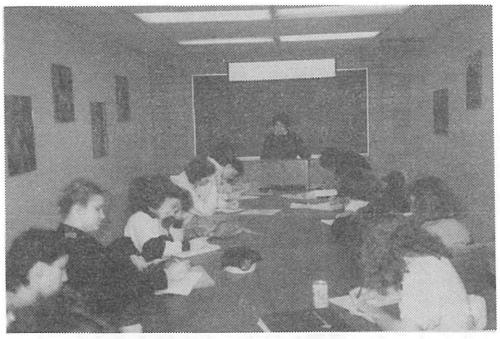
①競争について
②スポーツと暴力
③スポーツと薬物使用
④高校運動競技について
⑤子供とスポーツ
⑥コーチについて
⑦スポーツと宗教
⑧オリンピックについて
⑨スポーツとマスメディア
⑩スポーツと社会移動
⑪スポーツと女性
⑫体育と運動競技

(4)体育・スポーツの社会学

セージ教授担当，春学期，週3回，1回50分，受講生約12名，大学院生対象。

講義の柱は，学部生対象の講義(1)体育・スポーツの社会学的解釈とほぼ同じであるためここでは省略する。但し内容については，取り上げた文献も多くそのレベルも高い。

セージ教授は，スポーツ社会学者であるがスポーツ心理学やコーチング論にも造詣が深く，現在幅広く活躍している。またコーディ教授は，スポーツ心理学ないしスポーツの社会心理学と体操競技が専門である。次に，これらの講義に出席して感じたことを述べてみたい。まず第1に，教授と学生及び学生同志のディス



コーディ教授の講義風景

カッションが非常に活発である。日本の大学における教養課程や学部の講義のように，教官から学生への一方通行ではない。講義計画は，みごとという他はないほど綿密に立てられており，前もって指示されたテキストの章や関連文献を読んでおかないとこうしたディスカッションには加わりにくいし，また講義そのものにも出席しにくい。しかしながら，他方ではディスカッションの時間があまりにも長過ぎるのではないかと感じる場合が時たまあった。第2に，テキストや関連文献を使用する訳であるが，教授が講義中にこれらを取り上げてどこかの頁を開いて説明するようなことは滅多にない。これらは，各自が事前に読んでおくことが原則とされている。第3に，教授はあまり黒板を使用せず口答での説明が主である。学生は，教授の説明を聞きながら各自自分のスタイルでノートをとっている。ちょっと聞き漏らしたりすると，その場で質問するか後で他の学生に尋ねるなりしなくてはならない。第4に，学生はその学期を通じて何回かレポートを提出させられるし，最後には試験を受けなければならない。要するに，当然のことながら勉強しないと単位は取れない。UNCでは，卒業していくのは新入生の約6割であとの4割はいわゆるドロップアウト組ということである。他の大学を訪問したときにも，これと同じような話を聞いた。日本とは，事情がかなり違う。第5に，教授法が多様である。資料の配布をはじめVTRやスライドを使用したり，バズセッションや学生によるちょっとした研究（調査）の発表などを取り入れたりしている。学生は単に講義を聞くだけの存在ではなく，まさに主体的参加者という感じである。研究発表といいディスカッションといい，それは受講生が12～25名と極めて少数であるので可能だと思われた。ともあれ，講義は教授も学生も一生懸命のようである。私は聴講生のような立場であったので気は楽であったが，それでもときどき日本のことについて質問されたりしたし，講義を理解しようとしてやはり毎回緊張していたようである。以上は，悪までも私が出席した講義についてのみの感想であることを強調しておきたい。

3. 学生スポーツ

UNCの学生スポーツは，競技レベルや学生のかかわり方，位置づけ等の違いによって，対校競技（Varsity Athletics），クラブ・スポーツ（Club Sports），校内スポーツ（Intramural Sports），施設開放時のスポーツ（Open Recreation）に分けられる。

(1)対校競技

対校競技のチームは，運動競技部門の管轄下にあり，UNCは全米大学競技協会（National Collegiate Athletic Association，通称NCAA）の第2部（Division Ⅱ）に所属して大学間の対校競技を行っている。大学が認可し育成している種目は，男子はフットボール，バスケットボール，野球，テニス，陸上競技，レスリングの6種目，女子はバスケットボール，バレーボール，体操，テニス，陸上競技，水泳の同じく6種目である。意外に種目数は少ない。徳永[1]の報告によると，大規模なイリノイ大学でも男子11種目，女子8種目ということである。日本の大学の運動部のように，あらゆる種目のチームが大学を代表して対外試合に出かけていくということではない。チームのニックネームは熊であり，“UNC Bears”と呼ばれている。チームカラーは，ネービーブルーとゴールドである。競技シーズンになると，試合のスケジュールが学内の各掲示板に示され，また印刷物となって学生・教職員

対校競技（男子バスケットボール，UNC対ノースダコタ州立大学との試合）

表2　対校競技の成績

男子種目	年	成績	女子種目	年	成績
フットボール	1985	2勝 9敗	バスケットボール	1985〜'86	12勝14敗
バスケットボール	1985〜'86	12勝16敗	テニス	1986	15勝 6敗
野球	1986	18勝24敗	バレーボール	1985	23勝10敗
テニス	1986	13勝10敗	水泳	1985〜'86	12勝 3敗
レスリング	1985〜'86	4勝13敗	陸上	—	—
陸上	—	—	体操	—	—

その他にも配布される。試合の結果は，逐一大学新聞で報告され，勝った試合や活躍した選手などが写真入りでしばしば紹介される。どこの大学でも同じと思われるが，特に人気があるのはフットボールとバスケットボールである。これに次ぐのが野球である。UNCは，大規模大学ではないのでフットボールの専用スタジアムを持っておらず，陸上競技場（Jackson Field）で試合を行っている。観客収容能力は約8000人である。フットボールの試合は土曜日の午後に行われ，地域の人びとも大勢つめかける。またバスケットボールの試合も，地域の人たちも見られるように夜7時半くらいから始まる。もちろん，有料である。男子の試合のときは観衆も多く盛り上がるが，女子の試合はやはりパワーやスピードの点で男子に劣り面白さに欠けるためであろうか，観衆もそれほど多くはなかった。

対校競技のチームについては，すべてコーチが配属されており，選手たちも競技会で良い成績を上げるべく練習に励んでいる。参考までに，昨シーズンの各チームの成績を表2に示しておこう。男子の方は，テニスがようやく勝ち越しているだけで，全体としてあまり強くはない。女子はかなり強い方であり，テニス，バレーボール，水泳はいずれも良い成績を残している。

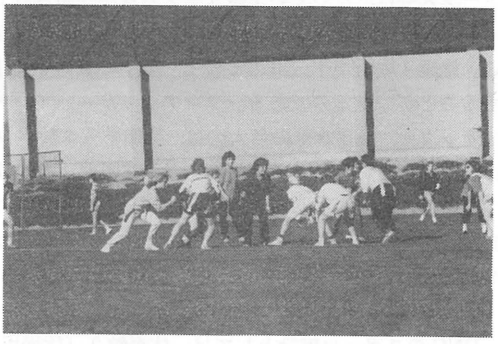
なおUNCでは，対校競技種目に準ずる扱いを受けている種目として，男子のゴルフと女子のサッカーがある。この2種目は，Club-varsity Sportsと呼ばれ，同様に対校試合を行っている。

(2)クラブ・スポーツ

これは，日本の大学でいえばいわゆる同好会レベルのスポーツ活動に相当する。すなわち，学生が技術の向上やそのスポーツについての知識を深めたり，あるいは仲間づくりや楽しさを求めて自主的，組織的に行うスポーツ・レクリエーション活動である。他の大学にもチームがあり，お互いに対校試合を行っている。ある教官の説明によると，クラブ・スポーツは対校競技種目とは違って大学はあまり重要視していないということであった。現在，クラブ・スポーツとして実施されている種目には，アイスホッケー，空手，ラクロス（男子），パワーリフティング，スキー，サッカー（男子），ロデオ，潜水などがある。

(3)校内スポーツ

学内には校内スポーツの部門（Intramural Department）が設置されており，ここではすべての学生にスポーツ参加の機会を提供するため，年間にわたって数種目のスポーツ大会を計画し実施している。校内スポーツの事務局では，大会についてのスケジュール，試合方法その他の情報提供，参加申し込み受付，試合の組み合せ，試合の運営，結果の記録など一切を担当している。参加するチームは，責任者としてチームマネージャーを必ず出さなければならない。以後，事務



校内スポーツ大会
（女子のフラッグフットボール）

局とチームの連絡はこのチームマネージャーを通して行われる。大会，試合の運営に当たっては，学生や大学院生がアシスタントとして活躍する。場所の割り当てや審判は，学生の手で行われる。試合のスケジュールは，事務局前の廊下の壁に大きく張り出され，また試合終了後はその結果が記入されるので，試合の進行状況が一目でわかるようになっている。大会に参加する場合，1チーム5ドルの参加費が必要である。校内スポーツ大会は，全学生を対象とするものであり，例えば対校競技で活躍している選手も出場できるが，専門とするスポーツとそれに近いスポーツの大会には出場できないとか，仮りに選手を途中で引退したとしてもそのスポーツの大会には1年間出場資格がない，といった具合にかなり細かな大会に関する規定が設けられている。これらは，大会の規模が結構大きく，トラブルを避けてうまく運営していくために設けられたものと思われる。

現在行われている校内スポーツ大会の種目は，フラッグフットボール，バレーボール，バスケットボール，ソフトボール，バドミントン，テニス，フロアホッケー，インドアサッカー，簡易水球などである。フラッグフットボールは，フットボールとルールはほぼ同じであるが，選手はプロテクターをつける代わりに腰にひらひらするフラッグをつけてプレイする。このフラッグを取るとタックルで倒したとみなされる。これには約100チームくらい参加し，女子の部（約20チーム）もある。約6週間かけて熱戦がくり広げられる。予戦リーグがあり，1チームが7試合くらいするという。またソフトボールも大変人気があり，約200チームが毎年参加するということである。バスケットボールも同様，約130チームの参加がある。校内スポーツ大会は，たいてい予戦リーグ方式が採用されており，1回戦で負ければそれで終りということはない。施設・場所が十分にあるので，多くの試合を消化することができるのである。フロアホッケー，インドアサッカー，簡易水球の各大会は，参加チーム数が30に満たないということで人気の方はあまり高くないようである。いずれにしても，多くの学生が整備された施設，広々とした芝生のグラウンドで十分にスポーツが楽しめるということは，うらやましい話である。

(4)施設開放

UNCのスポーツ施設としては，体育館2（体操場，ダンスルーム，トレーニングルーム，レスリングルームを含む），多目的競技場1，プール2，テニスコート12面，ラケットボールコート3面，陸上競技場1，野球場1，グラウンド2，その他オープンスペースが多数ある。とにかく，屋外に関してはスポーツや運動をする場所はいくらでもあるといった感じである。屋外のグラウンドやテニスコートは空いていれば学生も自由に使える。スポーツ施設のうち，体育館とプールは制度的に土曜日と日曜日の午後1時から5時までは一般に開放されており，大学の教職員，学生だけでなく地域の人びとも利用することができる。この時間帯についての施設の管理・運営には，アルバイトで雇われた学生が当たっている。私も，何度かこの制度を利用してバスケットボールや水泳を楽しんだ。スポーツの面に関しても，大学は開かれているという印象を強く持った。

おわりに

北コロラド大学の体育・スポーツについて，収集した資料やパンフレット，直接伺った話，見聞したことなどに基づいて紹介した。日本の大学の場合に比較して異なると思われる点がいくつもあり，私自身大変よい勉強になった。本稿が，日本の大学体育を考えていく上で少しでも参考になれば幸いである。

（付記）本稿は，拙稿「北コロラド大学滞在記」（九大学報，No.1255，九州大学事務局，pp.13～18，1987.）の内容を一部引用するとともに新たに加筆したものである。

文　献

1）徳永幹雄：イリノイ大学の体育・スポーツ，健康科学，第5巻，P.90，1983.
2）University of Northern Colorado：UNC Bulletin，1986—1987—1988，1986.
3）University of Northern Colorado：UNC Summer '87 Schedule of Classes，1987.
4）University of Northern Colorado：A Sporting Chance，A Guide to Intramural Activities and Student Recreation，1986.
5）University of Northern Colorado：Newsletter of the College，Human Performance and Leisure Studies，January，1987.